

認知症の母と 4歳の子と

4/10 朝日

大介護時代

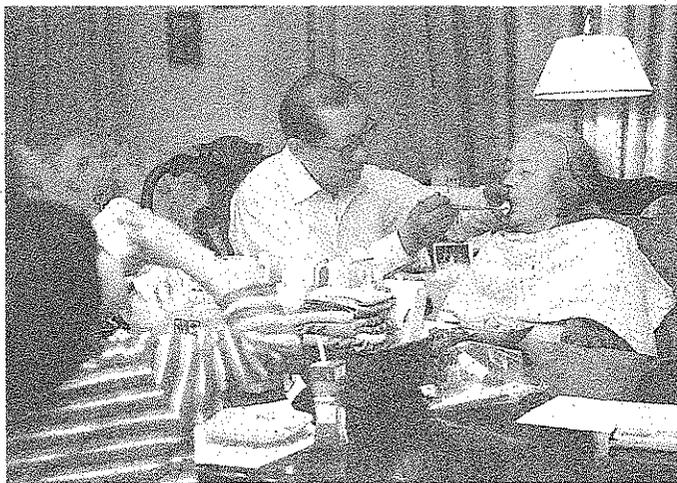
働きながら

①

働きながら介護を続ける人は約29.1万人いる。神奈川県鎌倉市の早田雅美さん(52)も、その一人。4歳の息子の子育ても同時進行だ。

夫婦とも会社員

小さく切ったパンにシロップをつける。目を閉じたままの母・美智子さん(52)の口を人さし指と親指で開け、はじで口を運ぶ。夜9時。会社から帰宅したばかりの早田さんはまだワイシャツ姿だ。「ハパー、これ作った」。ブロックで組み立てた飛行機を持った長男、詩音くん(4)がじゃれて、へっぴりづくで口を開く。「お、いじやん」。早



パンのほかに刻んだトマトや果物なども準備。母の口に運ぶ。長男はジュースを飲んだり遊んだり。神奈川県鎌倉市、池谷孝子撮影

田さんは、はしを手で挟みまげる。

食後は美智子さんをお風呂に入れる。ほほえまきりで手足がこぼれるので、マッサージをして寝かせる。詩音くんは「アニメ」などのDVDを

母と子の世話が同時に重なる。とっつきでも詩音くんの寝る時間は遅くなりがち。「いじやん、と願うけどもあるが、おはあちゃん」と一緒に暮らすのがどういじやんとか、息子にもわかってもらえたらと思う。

早田さんは、電通で働く広告プランナーだ。企業の社会貢献事業の立案などを担当している。航空会社に勤める妻の美和子さんは出張がとても多く、平日の介護と子育て

ワイシャツ姿で介助「家族と暮らすことが当たり前」

は、主に早田さんが担う。勤務は不規則だ。東京・汐留の本社を出るのは、定時あれば、午後8時をまわるとも。自宅まで約1時間半。新橋駅まで歩く途中で、その順の取決めを決める。

ヘルパーも利用

早く退職できた日は、「JR東海道線で自宅に直帰。横浜市の保育園で待つ詩音くんをマイカーで迎えに行く。遅くなった日は、京急線で保育園の最寄り駅へ。タクシーで園に向かい、息子を引取って一緒に帰る。

予期せぬ状況に備え、自宅からは少し遠いが、24時間対応の一時預かり保育がある保育園を選んだ。

妻の不在時は、早田さんが食事の支度をやる。ただ「料理は無理」ときっぱりあきらめている。スーパーやコンビニエンスストアで、野菜サラダや揚げ出し豆腐など食へやすい惣菜を買う。

美智子さんは2009年にレビー小体型認知症と診断された。その前から「部屋に見知らぬ男がいる」と突然言ったり、怒りっぽくなったりしていた。いまは要介護5。会話はほとんどできない。

通3日、デイサービスに通う。それ以外の日は、訪問介護を朝・昼・夜の3回利用する。夕食はヘルパーに食べさせてもらう。ただ夕方に十分食べきれないこともあり、帰宅後に軽食を食べさせることもある。気にならぬよう連絡用の大学ノートに書き、ヘルパーに伝える。「暑そうだったので毛布をかけすぎないよう伝えてください」などと、伝言は細かい。

何かあっても、母は自ら助けを求めることができない。約3時間の見守りヘルパーを自

己負担で頼んでいる。それでも社を出るのが遅いと、ついても母1人の時間が長くなる。最近では、部屋にカメラをつける見守りシステムを入れることを考え始めた。

放逐作家として多忙だった美智子さん。受話器を耳にはさんで打ち合わせをしながら、手に鍋を持って料理をしている母の姿が記憶に残る。

息子の早田さんには、母が体力、氣力をきりぎりまで使った果たしているように見えた。それでも父は、その時代の多くの男性と同じく、家事には手をたさなかった。介護を育児も、自分はやれることをやる。そんな思いが、心のどこにある。

妻の美和子さんは、出張がないと言は詩音くんの送り迎えや、家事全般を担う。仕事を辞めるべきか、迷ったこともあったという。だが相談した夫の答えは「辞めない方がいい」と明確だった。早田さんは言う。「自分も仕事で悩んだ時は家族が支えたし、その逆もあった。両方あってこそ思っから、妻にも仕事を辞めてほしいな」

父の最期に悔い

施設入居をすすめられることもあった。引かかっているのは、14年前に亡くなった父についての記憶だ。

アルツハイマー型認知症を発症した父は、徘徊がひどく精神科病院に入院した。「出してくれ」と訴え、手が腫れるほど病棟の戸をたたいた。見舞いに行く度に涙がこぼれた。父はその後、介護施設、有料老人ホームを転々とした。自宅に戻るとなく、病院で亡くなった。

「介護は大変。でもこの家で家族と暮らすことが、母に当たり前前のことだから」「職場の会議に出られなくな

と思うようにいかないこともあるが、置かれた状況でやるべきことをやる。と企画やアイデアの提案に力を入れる。介護をしながら働く人、認知症の人への理解を深めてほしい。そんな思いが募り、NPO活動も昨年から始めた。介護経験を伝えたり、企業を訪問したり、といった活動をしていきたいと考えている。

「僕も妻も、あと30年もすれば、息子に介護される側になる。その時に生きやすくなる。家族も介護しやすい社会になってほしい」(畑山敦子)

介護責任を誰が担うのか。誰もがその問いに向き合わねばならない時代を迎えた日本。年間企画「大介護時代」を生活面から始める。第1部「働きながら」は6回連載します。明日は長きにわたり妻を支える2人の男性を紹介し